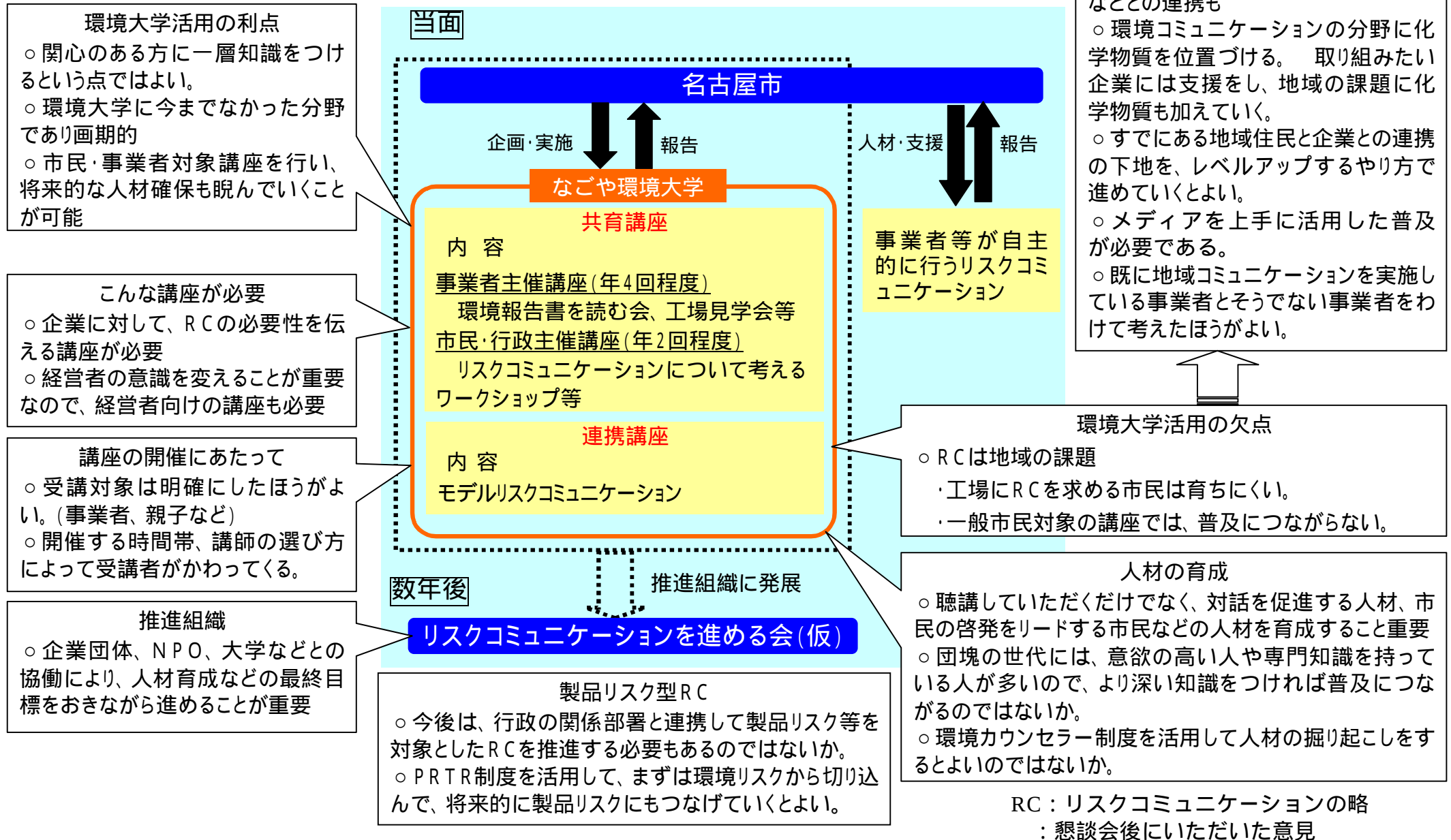


第7回懇談会で出た意見の概要

議題1 リスクコミュニケーションの普及について



議題2 手引書の作成について

・化学物質を対象としながらも、環境問題全般のリスクコミュニケーションを意識することが重要

企業のトップや事業者団体への働きかけが重要

現段階では、対象は事業者と限定してもよい。

「なごや発！化学物質のリスクコミュニケーションのすすめ」

・「リスクコミュニケーションを進める会(仮)」についても記載したほうが良い。

目的 普及啓発 + 具体的マニュアル
対象 事業者(市民が実施を求める場合も想定)
内容

・事故時のRCは双方向のコミュニケーションにはなりにくいという懸念がある。
周辺住民にとっては不安材料であり、双方向のコミュニケーションを目指すべき

・モデルRCのやり方は最も手間のかかる部類のものなので、内容によっては「上級編」にするなどしたほうがよい。

・「基準を守っていますの繰り返しは不信感を生む」の箇所の表現は、丁寧に書かないと、基準を守ることが重要ではないと誤解される。

・委員の氏名を記載したほうがよい。

本編	はじめに リスクコミュニケーションとは？ リスクコミュニケーションを行うきっかけ 日頃からのコミュニケーションの充実 参加者の役割 参加者を決めよう プログラムを組み立てよう 説明のための資料を作ろう 工場見学のコースを決めよう 円滑なコミュニケーションのために 説明するときの留意点 実施後のとりまとめ リスクコミュニケーションの具体例
	PRTR制度 リスクコミュニケーションに関する規定 環境基準 化学物質のリスク評価 なごや化学物質リスクコミュニケーション懇談会 化学物質アドバイザー制度 リスクコミュニケーションに役立つ資料

RCを市民が求める場合
・手引書で別途定めてはどうか。
例： RCを知る RCの目的 対象工場探し 手引書を読み込む 工場に交渉 RCの実現に向けて RC実施

・ファシリテーター等の人材については、手引書の発行時点で体制が整っていないのではないか。
→名古屋市が責任をもって相談に乗りたい。

・通常時と事故時のRCではやり方(説明の留意点など)が異なってくるので、部分的にでも数パターンのマニュアルにしたほうがよい。

RC：リスクコミュニケーションの略
：懇談会后にいただいた意見